

ブダペシュト製粉業における工場制度の確立

高田茂臣

(京都大学大学院経済学研究科 博士課程)

あだたら高原岳温泉郷 鏡が池 碧山亭

2005(平成17)年3月26(土)

1 産業革命と製粉業

急速な発展を遂げた19世紀後半のハンガリー経済において、小麦製粉業は同国最大の工業部門であり、また最大の輸出工業でもあった。ゆえに、製粉業の変革こそ、ハンガリーに機械制大工業を創出し、それによって同国における産業革命の流れが形成されたと考えられる。

19世紀後半のハンガリーにおける工場制諸産業の地理的分布を特徴付けたのは、資源依存型立地の鉱業や製鉄業を別とすれば、首都ブダペシュト(ペシュト、ブダ、オーブダの合併で1873年に成立)とその周辺への集中である。この点から、ブダペシュト製粉業における工場制度の確立が、ハンガリーにおける産業革命の中核をなしたと考えられる。

2 ブダペシュト製粉業の前提条件

(1) ペシュト製粉社の先駆的企業活動

ハンガリーにおける機械製粉業の基礎は、1839年に設立(1841年に操業開始)されたペシュト製粉社によって定置された。同社の企業活動は、ロール製粉機を始めとする近代技術の導入の試金石となったばかりでなく、株式会社という近代経営の試行を通じて、ブダペシュトにおける資本主義的な製粉業発展の起点となった。

(2) 加工原料・資本調達の有利化

ペシュトでの穀物取引は1850年代まで、ハプスブルク帝国の中では目立つ規模ではなかった。しかし、1860年代半ばから70年代前半までに、当地を集散拠点とした流通経路が台頭してきた。ペシュト商品・証券取引所の開設(1864年)は、穀物市場の強化としてばかりか、企業勃興を可能にする資本市場の創出としても役立った。

(3) 燃料調達の有利化

1867年に、ハンガリー国内最大の褐炭埋蔵量を誇っていたシャルゴータリャーン炭田が鉄道でブダ・ペシュトと結ばれたことは、当地の蒸気製粉(動力に蒸気を用いる製粉工場)を燃料面から支援することにつながった。

3 企業構造の確立

こうした前提の上に、ブダペシュト製粉業は、1860年代後半からの「創立熱狂時代」に10社余りからなる寡占的企業構造を確立した。

4 機械体系の確立

製粉技術の中核をなす挽砕工程においてロール製粉機の使用が石臼に代わって一般化し、原料（穀物）が一経営内で連続的に行なわれる段階的な諸作業を経て製品（穀粉）に仕上げられる今日の生産体系が確立したのは、①精選－原料小麦の中に混入した小石や不良穀粒を取り除くこと－②挽砕③篩別④純化－篩機で篩い分けられなかったふすま（表皮のくず）や胚芽を分離して、粗粉の純度を高めること－の諸工程を担う部分作業機の組合せとしての、機械の分業による協業が確立した1880年代末であった。

5 経済政策の効果

ハンガリーの機械製粉業は、ハプスブルク帝国の統一関税圏から共同市場利益を得たほかは、基本的に政府の産業政策なしで自生的な発展を遂げた。

6 資本と賃労働の確立

ハンガリーにおけるブルジョアジーの基本的な形成ルートは、商人資本の産業資本への転化であった。ブダペシュトの製粉工場労働者も、彼らの資本家同様、基本的には旧来の粉挽職人の社会環境とは断絶した所で出現した。機械製粉業における資本－賃労働関係は、製粉資本家団体と製粉労働者の相互扶助組織の同時的成立によって1880年代末に確定した。

7 小括

技術的および社会的観点から見て、ブダペシュト製粉業は1880年代末までに工場制度を確立させたとと言える。ブダペシュト製粉業は、近代ハンガリーにおける主要大企業の地位を占め、二重帝国期を通じて産業資本蓄積の要であり続けた。ブダペシュト製粉業の意義は、こうした経済・産業上の地位を、農業国の条件を活用して築いたことにあると言わねばならない。